

# 「脳」で変身 ぱちんこ店 「みんなの健康広場」に

諏訪東京理科大学教授  
日遊協理事

篠原菊紀

## 第1回

# 歩くイベントで縁結ぶ

# 「パチンコ大学95」の試み

この一月に新しく日遊協の理事に就任させていただいた、諏訪東京理科大学の篠原です。専門は脳科学と応用健康科学です。

私は、10数年前、ぱちんこをしている人の血液中のドーパミンやβエンドルフィンとの分泌量を調べ、ヘビーユーザーほど大当たり時の分泌が高いとの報告をして以来、いくつかのメーカーやホール団体とかかわらせていただけてきました。その中で、ユーザーに支持される機種での脳活動の特徴とか、依存症予防のために業界が行うべきことは何かとか、ホールのサービスは脳から見るとどう位置づけられるかとか、さらには認知症予防にこの業界がどうかかわれるかなどについて考えてきました。

## 意外にもタバコに 気持を通じる効果

この連載ではそういったことがらを中心に、脳についてのポップ

な話題を交えながら、あれこれ考えていきたいと思っています。たとえば、最近、浜松医科大学などの研究チームが、自閉症の方が顔写真の表情判断をしている時の脳活動を報告しました。それによれば、右紡錘状回という顔表情判断に深くかわる部位でアセチルコリンの働きが低下しており、その低下の度合いと人の気持ちかわからない程度が相関したそうです。

この話、ぱちんこ業界とは無関係そうですが、禁煙化が進む中でホスピタリティという視点からみれば随分示唆的な研究になります。実はタバコはニコチンアセチルコリン受容体に結びついて、短期的にはアセチルコリンの働きを高めます。ですから、タバコにコミュニケーション促進効果がある可能性があり、だとすれば、店の禁煙化がすめばコミュニケーションの苦手な人はこちらの気持ちもますます誤解しやすくなるかも

しれない、若い従業員のコミュニケーション力不足は案外タバコ撲滅とかかわるかも、といった方向でも考えられるからです。この連載では、こういった新しい話も交えながら進めていきたいと思えます。しばらくお付き合いください。

## 超高齢化社会への 対応が分かれ道に

さて、今回は「ぱちんこ店を地域の健康福祉資源に化けさせよう！」と題して、超高齢化社会で生き残る「ぱちんこ店像」について考えてみたいと思います。

あらためて言うまでもなく日本は超高齢化社会です。国立社会保障・人口問題研究所の2006年人口推計によると、日本の人口は2009年をピークに年々減少していきます。このことは、ぱちんこ市場に限らず、あらゆる内需産業が縮小傾向とならざるを得ないことを意味しています。

しかし、この人口減少のなか高齢者人口は増加します。具体的には、65歳以上人口が2010〜2015年で約500万人増加し、2020年には3500万人を突破、その後も漸増し人口上のウェイトでは4割を超えていきます。つまりあらゆる国内市場で高齢者比率が拡大していき、この層への対応が内需産業の盛衰に大きくかわるわけです。

さらに、この高齢化にともなって孤独な高齢者が増えていきます。2025年には高齢者単独または高齢者夫婦のみの世帯が1300



しのはら●きくのり

1960年生まれ。長野県茅野市出身。東京大学教育学部卒業、同大学院教育学研究科修了。現在は、諏訪東京理科大学共通教育センター教授、学生相談室長、東京理科大学総合機構併任教授。専門は脳神経科学、応用健康科学で、アミューズメント、教育、電子技術産業など多数の共同研究を手がけている。1月から日遊協理事。マスコミへの登場も多く、著書も多数。

万世帯に迫り、同時に、認知症高齢者の数は増加を続け、2025年には323万人と予測されています。

したがって、高齢者、とりわけ家族からは比較的に独立な、高齢者のみの世帯や独居老人への生きがいサポートと認知症予防が、今後の日本の大きな課題となります。あとで詳しく話しますが、「乏しい社会支援」がアルツハイマー病および認知機能低下のリスクを高めるとの証拠もあるので、生きがいサポートサービスがそのまま認知症予防対策にもなります。

## 店長はいわば村長 頭や体のサポート

わたしは、この日本の高齢化問題、とりわけ家族から比較的独立な高齢者の生きがいサポートおよび認知症予防に、全国1万3000店舗のぱちんこ店が強力に貢献できているのではないかと考えています。ぱちんこを中心とする「新たな縁」が地域で失われていった人々とのかわりを復活させ、その「新たな縁」が生きがいや認知症予防につながる（人とかかわる）。さらに、ぱちんこ店はユーザーがも

っと知恵を使つてぱちんこしてもらおう（頭を使う）、運動指導・サポート（体を動かす）、食事指導・サポートもしていく（体に気を使う）。

あとで述べ

ますが、「頭を使って」「体を動かす」「体に気を使い」「人とかかわる」ことこそ認知症および認知機能低下予防の基本。その健康・福祉施策の具体的な実践をぱちんこ店が担うのです。それが高齢化が進む中でぱちんこ店が生き残っていく道。しかも、地域の健康、福祉について欠かせない資源として生き残っていく道だと考えるわけです。そしてそれは、今のユーザーにできるだけ長く健康でいてもらい、できるだけ長く店に通ってもらうための重大な戦略にもなりうるのです。

店長がいわば村長となつて、小行政を担う、ユーザーの生活全般

図1 年次別65〜74歳人口(千人)

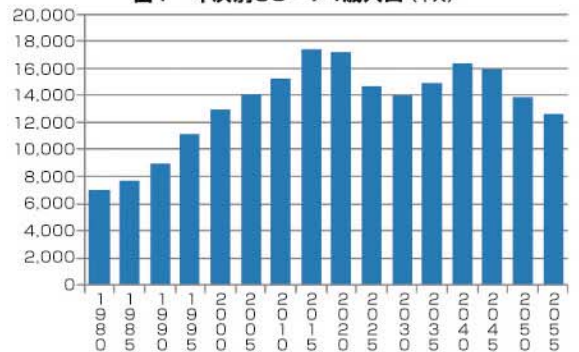
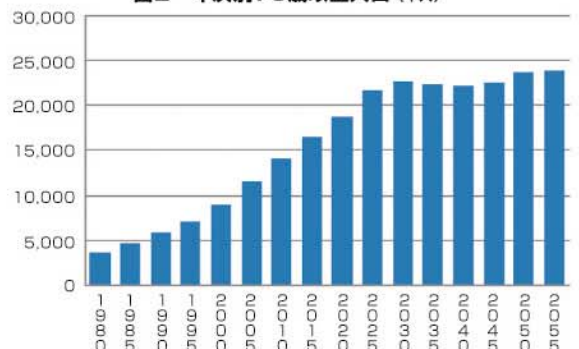


図2 年次別75歳以上人口(千人)



に貢献する。このことが、中長期的なこの業界の生き残り戦略になるのです。

## ベビーブーマーに 合わせて事業展開

すでに述べたように今後の日本の国内市場は高齢者層がそのウェイトを増していきます。その高齢者層の年齢構成の変化を見ると、図1に示すように、65〜74歳人口は2015年に1700万人を超え、2016年に1744万人とピークを迎えます。しかし、2021年までは1700万人台で推移するが、その後65〜75歳人口は急減し、2030年までは1400

万前後で落ち着いていきます。そして、その後2040～2045年では1600万人程度を維持するが、その後は再び減少していきます。一方、**図2**に示すように、75歳以上人口は2010年の1422万人から2015年には1645万人、2020年には1873万人と急増し、2026年に2200万人台に達しその後安定します。

このような高齢者内人口比の変動が生じるのは、主に、終戦から1950年生まれまでのいわゆるベビーブーマー世代約一千万人が大きく影響しています。すなわち、ベビーブーマー世代が2015年にすべて65歳以上となり、2025年にはすべて75歳以上となることが、2015年までの急激な65～74歳の増加、2025年以降の75歳以上の急増の主因です。したがって、高齢者の生きがいサポートと認知症予防を考えると、この膨大なベビーブーマー世代に合わせたサービス展開を常に念頭に置く必要があります。

## 的確なサービスへ 高齢者の分類必要

ここで、ばちんこ業界の市場動

向に目を転ずると、皆さんご存じのように、1995年のパチンコ・パチスロ参加人口は2900万人、売上約31兆円であったが、2008年には参加人口が1580万人、売上は約22兆円にまで落ち込みました。店舗数も1万8244軒から1万2937軒と大幅に減る一方でパチンコ・パチスロの設置台数は、476万1083台から452万5515台と減ってはいる

が、店舗数の激減に比べて少なく、一店舗当たりの設置台数増、すなわち、小規模店の閉店、大規模チェーン店化が進み、小規模店や小規模チェーンの生き残りをかけたサバイバルレースが進行しています。

ところで、先述のベビーブーマー世代はパチンコ・パチスロが好調な1995年当時45～48歳であり、パチンコ・パチスロのコアユーザーでした。そして、その後、パチンコ・パチスロ業界は、新規ユーザー、若者ユーザーの獲得を目指し、遊べるパチンコ・パチスロキャンペーンなど様々な努力を続けているにもかかわらず、新規ユーザー等の獲得にほぼ失敗しており、ユーザーの高齢化が進んでいます。結果として、今現在もベ

ビーブーマー世代が重要なコアユーザー層であり続けています。

そして、このような人口動向及びパチンコユーザー層の動向から浮かび上がってくるばちんこ店の高齢者サポートサービスのスケジューリングは、2010～2015年はベビーブーマー世代の高齢化に合わせ65～75歳ユーザーを意識したサービスの構築を目指し、2015～2020年はその充実、2020～2025年は75歳以上ユーザーのサービス体制の構築、2025年以降は75歳以上を想定したサービスの展開となります。

直近の5年では、2015年の65～74歳、1700万人時代を見越した高齢者サポートサービスの充実が、店舗生き残りの重要なカギとなります。そしてその際のポイントのひとつが、短期的なギャンプルとしてではなく、長期的な生きがいとしてばちんこを位置づけることであり、そのことを核とする認知症予防および認知機能低下予防サポートです。

## 低貸玉の営業が 生きがい提供に

ばちんこが高齢ユーザー、とり

わけベビーブーマー世代にとっての長期的な生きがいであるためには、この世代の高齢化に伴う可処分所得の低下に合わせ、貸玉料を安くしていく、台粗利を抑えていくなどしてユーザーが長く遊べる環境を作ることが必要です。すでに地方ばちんこ店の一部は10年ほど前から、高齢者のたまり場、憩いの場と化しており、金銭面を含めた長く遊べる遊技環境の構築は急務ですが、幸いなことに、2005年ごろから低金額で遊べるパチンコ・パチスロを増やそうという運動や、デフレと相俟って（この国のデフレ自体、人口構成の高齢化によるといえる）考え方もある）、2007年ころからは貸玉料金を4円から1円とする一パチの増加さらに最近では50銭パチンコの出現など、低価格化が著しく進行しており、ばちんこ店は高齢者への生きがい提供資源としての利用可能性を高めています。

一方、ばちんこ店の認知症予防サポートはごく一部の店が実施しているにすぎないので、この意図的な展開が他店舗との差別化戦略となりえます。しかも、今後、高齢化問題に直面させられるのは、

図3 パチンコ大学95の健康ばちんこ

## 認知症予防への 共通の話題作り

実は地方ではなく都市部です。たとえば、島根県の2004年から2025年の高齢者人口は2万人増(+8%)、秋田県は4万人(+14%)ですが、東京都は85万人(+38%)、埼玉県は87万人(+80%)、大阪府は64万人(+41%)と推測されています。したがって、高齢ユーザー、とりわけベビーブーマー世代への対応は、都市部ばちんこ店でこそ急務です。

東村山久米川の「パチンコ大学95」は「健康ばちんこ」に取り組んでいます(図3)。「パチンコ大学95」の「健康ばち

んこ」は、ユーザーに高齢者が多いことから健康をキーワードに認知症予防をテーマとした取り組みを行い、ユーザーと店員がパチンコ以外の共通話題を持ち、「パチンコ大学95」にしかできないユーザーの囲い込みを目指したものです。「パチンコ以外の共通話題が持てる」「一歩踏み込んだ接客が可能」「新台入れ替え・イベントに左右されないユーザーを得る」「勝ち負けだけのお店選びをしないユーザーを得る」「万歩計95店のような健康イメージをつくる」「気軽に来店してもらおう」「健康ばちんこを生活の一部にしろおう」「ユーザーの認知症予防で末永く遊技してもらおう」「家族そろっての

健康対策で息子、嫁、孫と来店、を目指す」などをねらい、同店を久米川のヘルスケアステーションとすることを目指しています。具体的にはウォーキングイベント等をユーザーサービスの一環として位置付け、ユーザーの健康サポートと、このイベントをきっかけとしたユーザー・店員間のコミュニケーションの充実を目指しています。なお、同店舗は「健康ばちんこ」のほか、「街の便利屋」と称して自転車磨きなどをサービスとして続けており、健康ばちんこも地域貢献サービス、社員の生きがい創出策の一環と位置付けられています。

## ウォーキングから 有酸素運動測定

以下にこれまでの「パチンコ大学95」久米川店での「健康ばちんこ」イベントの概略を紹介します。

### (1) 札幌まで歩こう!

ウォーキングイベント第一弾。2008年9月より実施。参加者を募り、オリジナル万歩計、札幌まで歩こう表を配布。参加者は歩こう表と万歩計をパチンコ店員に示して、チェックしてもらおう。達成者

には表彰などを行う。店内には健康ばちんこ促進ポップを貼り、認知症予防体操DVDなどを流した。

### (2) H C 1 を使おう!

ゴールデンウィーク特別企画。2009年5月、企業の協力を得て脈波から心拍数を推定し、有酸素運動ゾーンを特定する機器を用い、有酸素運動ゾーン体験イベントを実施した。この結果および摂取カロリー推定から、個人別に必要散歩量を提案した。

### (3) 四国お遍路めぐり

ウォーキングイベント第二弾。2009年10月より、四国八十八か所お遍路ツアーを実施した。(1)と同様に参加者と店員のコミュニケーションを指す。札幌までだと目標が遠く、こまめな達成感を目指して札幌めぐりとした。

### (4) 日本列島をぶった切れ

ウォーキングイベント第三弾。2010年6月より、湯河原から親不知までの日本列島横断ツアー。内容は(1)(3)と同様。1日5000歩で6か月で達成見込み。中間地点(箱根、丹沢、高尾、奥秩父、八ヶ岳、霧ヶ峰、北アルプス南部、北アルプス北部)では、ご当地プレゼントを行う。

## 頭を使い体使って 人とかがわかること

アメリカ国立衛生研究所は2010年4月、「アルツハイマー病と認知機能低下の予防 Preventing Alzheimer's Disease and Cognitive Decline」をテーマにした会議を開きました。そして、これまでに研究されたアルツハイマー病の予防や認知機能低下予防に関する原著論文250について Duke Evidence-based Practice Centerが「Preventing Alzheimers Disease and Cognitive Decline」として報告書をまとめました。

それによれば、〇〇がアルツハイマー病や認知機能低下の危険性を高めることが認められたものとして、APOE ε4 遺伝子、プロジェステロンとエストロゲンの併用、非ステロイド系の抗炎症剤、うつ状態、糖尿病、中年期の高脂血症、男性の頭部外傷、殺虫剤、未婚・乏しい社会支援、現在の喫煙が挙げられました。一方、〇〇がアルツハイマー病や認知機能低下の危険性を低めることが認められたものとして、認知的活動、高い身体活動、地中海風料理、葉酸、

図4 フローバグループの取り組み

高コレステロール血症剤（スタチン）、高い教育歴、軽度から中程度の飲酒が挙げられました。

ざっくりまとめれば、「頭を使っ  
て」体を動かし「体に気を使っ  
て」人とかがわかることが認知症お  
よび認知機能低下予防に役立つの  
です。

## フローバの活動も 持続する地域貢献

「パチンコ大学95」久米川店の  
「健康ばちんこ」の試みを振り返  
ると、ばちんこ自体に元来頭を使  
う要素があり（ここはメールの流

し方などでもっと工夫できる）、  
それに加えてウォーキングイベ  
ントに参加することで体を動か  
し、生活習慣病予防につながり、  
さらに、イベントに伴うコミュニ  
ニケーションの促進によって、  
認知症予防および認知機能低下  
予防に貢献する試みであると評  
価できます。

この試みはまた、セブンイレ  
ブン並みの店舗数を有するばち  
んこ店が、高齢化社会における  
地域の健康福祉資源として活用  
可能であることを示します。何  
よりも楽しみの場で健康教育が  
行われることは、その継続性の点  
で有利で健康教育上の意味は大き  
くなります。さらに食事サポート  
や医療機関、介護機関の併設、オン  
デマンドバスなどによる免許証返  
上後の交通手段の提供、ばちんこ  
好き高齢者専用住宅の併設、葬儀  
機能も持つなどすれば、楽しさに  
包まれ墓場までの地域健康福祉サ  
ーションとして必須なものとし  
てばちんこ店がその地位を獲得す  
ることも十分考えられます。

幸いなことに、たとえば広島  
のフローバグループによる「遊びで  
元気になるうキャンペーン」(図

4) など、「健康ばちんこ」的な動  
きもいくつか始めており、例え  
ば全国の一割程度の店舗でこのよ  
うなサービスが展開されていくよ  
うになれば、地域の健康教育シー  
ンは大きく変わるでしょうし、お  
役所任せの福祉サービスも変わっ  
ていくでしょう。

ばちんこ店が遊びを軸とする新  
しい縁で人を結び、その人たちの  
健康福祉を担う。そこでもきちん  
と利益が出てくるようにしていく。  
持続可能で強烈な地域貢献をばち  
んこ業界が行う。それができた時  
ばちんこ店は地域にとっての真の  
必需品になります。そしてばちん  
こ店の店長は、一昔前の村長、駐  
在、校長、郵便局長のような地位  
を得る。夢想などではない、と確  
信しています。

### 参考文献

- 1) 篠原菊紀ほか：パチンコ店を高齢化社会の健康資源にしよう！～「健康ばちんこ」を巡る考察～、文理シナジー 第15巻1号 in print (2011)
- 2) 篠原菊紀：未来のためー貢献が可能な産業、日刊工業新聞8月31日 (2010)
- 3) 国立社会保障・人口問題研究所、日本の将来推計人口(平成18年度12月推計)、表1 出生中位(死亡中位)推計 (2006)
- 4) 厚生労働省老健局総務課推計(平成15年6月) (2003)
- 5) 全日本遊技業協同組合連合会HP内各種統計一覧、遊技場店舗数、遊技台数一覧表(警察庁発表) (2010)
- 6) NIH news April 28, Independent Panel Finds Insufficient Evidence to Support Preventive Measures for Alzheimer's Disease (2010)
- 7) John W. Williams, et al. Preventing Alzheimer's Disease and Cognitive Decline, Number 193, AHRQ Publication No. 10-E005 April 2010 (2010)